

をやったりしていた。ただし、それは進級の条件にはならなかった。

工芸化学の授業では、材料の成分、分析などを学んだ。写真科の教官であった写真の権威者の森芳太郎先生と鍍金の内藤春治先生、漆の福岡縫太郎先生に習った。漆は塗料で象嵌の実験をした。一ミリ腐食させて、そこに漆を焼付けて埋めて、研いで色付けをした。漆の乾きが悪いと浮いてきた。

地金は今と同じで、特殊な金属だけ（四分一や赤銅）は吹いて作って使用した。アルミニウムは、戦前は量産的な工芸品にはかなり使用されていたが、工芸品の素材としてはあまり使われていない。接合がうまくできなかったこと、腐食すること、着色ができないことなどの理由からだと思う。戦後はアルマイト加工が進歩して手軽に加工してくれる場所ができたこと、それによる腐食の問題がなくなったこと、また色が豊富につけられるようになったので展覧会の出品作品にもアルミニウムの作品が目につくようになった。

道具は自分で作るので、なかなか一年では揃えるところまでできず、三年でぼちぼち作った。当て金は今のものと基本形は同じだが、数が少なかった。同じものは一本か二本きりなかった。今は人数が多くなったから同じ課題をやるのに五、六本は最低必要だが、当時は一本の当て金を待って使ったり、あの道具を使うなら今日は早く行かなければと思ったりした。道具を火に入れて直したり、やすったりひねったりしてはいけない。ほとんど課題に合っているからである。自分の課題は自分で道具を作った。それで道具を作ることを覚えていく。私の卒業制作は道具が合わなくて自分で作った。

道具の面のカーブはひどく難しく、大きすぎても小さすぎてもいけない。あまりびたっとくっついていられないものだ。我々が学生の時はびたっとついていれればその通りにできると思っていたが、そうならない。道具を作ることが非常に難しいとわかってくる。卒業する時までには二十本か三十本作っていった。学校の備品の道具を作る時は今のように外に頼むのではなく、鍛冶屋を連れてきて、ふいごを使って作るのを見て教えてもらう。彫金に七十すぎの助手がいる、鑿の研ぎ方や地金作りを教えてくれた。よく叱られたのを覚えている。当て金を作っている時に手で撫でて、手の脂が付くとすべって、やすりがかからなくなるし、やすりが切れなくなる。よく怒られた。金工は言葉や理屈ではなくて秘伝みたいなものがある。

⑬ 昭和初期の漆工科

左記は編者の質問に対する昭和六十一年七月十日付、寺井直次氏（昭和十年工芸科漆工部卒）の回答書簡の要約である。

(一) 入学した年の実習について

私達の時は予科はなく入学してすぐに本科一年生でした。一年生の実習時間は尠なかった。上級になるにつれて実習時間が増え、五年生になってからは教員免許修得希望者のみ関連教科を受け（週一、二時間だったか）その他は全時間卒業制作だったと思います（他に希望教科の講義を聞くことも出来ました）。一年生の実習は本堅地の塗の手板十枚だったか（五枚だったか）、呂色艶上げまで仕上げて学年末に提出するのでした。漆その他実習材

料は全て原則として自弁でした。漆屋さんが良く実習室に來られ少量でも快く持って来て呉れました。日本産漆も使いましたし中国産の入っていると思われる瀬漆なども使いました。地の粉、砥の粉、コクソ綿など副資材は学校のものが沢山置いてあり、自由に使っても良いことになっていました。

(二) 二年生以降の実習について

二年生は主に蒔絵の手板で、何枚だったか覚えていませんが、お互い上級生や展覧会その他の雰囲気刺激されて小器物を造りました。学校からも何か課題が出ていた様にも思います(小箱、眞箱、盆などの小品一点程度)。上級になるにつれて課題作品(器物)も少しずつ増え、自由作品も多くなり、四年生までには手箱、盛器、小家具調度品など各自それぞれの作品を造った様になります。乾漆成形なども習いました。蒔絵の手板実習は三年生くらいまでだったでせうか(小品は展覧会などにも出品しました)。

(三) 漆工科の教官について

磯失先生は昭和六、七年頃から着任されたと思います。その頃(私が入学して以来)漆工科の実習は主任六角紫水、松田権六、山崎覚太郎の諸先生でした。三先生は実習室を時折り廻って來られ、図案についてのアドバイスや実技の指導をされました。二年生になって初めて蒔絵を習う時、六角先生が線描筆の使い方、線の引き方など、全生徒を集めていてねいに教えられ、今は最初から漆絵で練習をするが昔は「胡描き三年」と云って胡粉を水で溶いたもので三年線書きの練習をしてから漆を使ったなどという話をされたことを覚えています。松田、山崎先生も同様に、時には

手取り足取り、或は自から見本を示して教えられました。沢口悟一先生は漆器製作法、吉野富雄先生は漆工史(はじめは六角紫水先生、高学年になってから吉野先生が担当)。八木橋さんは塗りだけの講師でした。昭和八、九年の頃から週に何回かだけ見えたのではないかと思います(短期間だったのではないか)。高野松山先生は漆工科の部屋には殆んど見えず、図案科の生徒に教えておられたのだと思います。私は個人的に昵懇に願っておりました。各先生方はそれぞれ個性ある指導をされました。一口に言えば、松田先生は温古知新的で、山崎先生は新しい思想のものが中心でした。八木橋さんは実技(髹漆のみ)の上手な匠と云う感じで、国会議事堂のご便殿の漆塗、乾漆加飾などの塗の技術監督の様なかつこうで活躍され(私も夏休み中アルバイト的に多くの職人さんに交ぜてもらい働いた折から懇意にしておりました)その後学校に助手的?に來て教えられたようです。

(四) 卒業制作について

私等の少し前は卒業制作の費用が支給されましたが、私等の時は一切支給されず、漆工科の卒業制作の内から一点だけ学校で買上げることになっていました。金工科も同様に聞いています。漆工科ではたしか材料費や手取希望価格などを参考に聞かれたと覚えています。確定価格は学校側で決定し現金で支払いされたかと覚えていません。材料実費よりやや多めに査定された様です。卒業制作だからと特に定まった指導はなく、生徒の方から相談すればどんなことでも指導されましたが、要は生徒の自主性の問題でした。